

インドにおける二つのキリスト教——村と聖地

田中雅一

一 二つのキリスト教

一六世紀以後西欧列強の勢力拡大にともなうて、キリスト教はより組織的な形で西欧の外へと広がっていった。それは仏教やヒन्दゥー教など東洋で生まれた宗教との邂逅を意味し、また西欧文化と非西欧文化との葛藤の始まりであった。どの宗教が救いの手段として優れているのか、どの宗教の教えが正しいのか、どちらの神が強力なのかといった問いかけが、しばしば公開の場で争われた。ここでは神学的な問題が受容と拒否の基準であった。⁽¹⁾しかし、こうした「邂逅」と平行して、支配者の宗教であるキリスト教は社会に着実に根付いていった。

ここで対象とするのはインドのキリスト教であるが、歴史的に遡って一七、一八世紀のキリスト教受容の過程を辿るのではなく、むしろヒन्दゥー教徒が圧倒的多数を占めるインドにおいて現代の

キリスト教がどのような形でヒन्दゥー的要素を受け入れまた拒否しているのか、それがどのようなダイナミズムをキリスト教世界にもたらしているのかをカトリックに限定して探ることを目的とする。

こうした問題意識を念頭に、今日のインドのキリスト教とヒन्दゥー教との関係を考える上で重要な二つのタイプを紹介しよう。

一つは、キリスト教がインド社会の特徴とされるカースト的階層構造を信徒の世界に導入している場合である。そこで信者はいくつかの内婚集団に属し、どの集団に属するかによって社会的な地位が決定し、相互関係が決まる。これは改宗が個人というよりは、カーストあるいはその下位集団であるサブ・カースト単位でなされ、キリスト教に改宗する前のカーストの地位をそのまま継承しているからだ⁽²⁾と説明されている。そこで注目したいのはカースト差別、とくに不可触民（ハリジャン）出身のキリスト教徒たちが受ける不当な差別とそれにたいする彼らの抵抗である。⁽³⁾カーストの温存は村落に根